

# 平成28年度「全国中学生人権作文コンテスト」岐阜県大会 最秀優賞（岐阜地方法務局長賞）

## 心を通わせて

大垣市立北中学校三年 藤森 諒

.....  
毎年夏になると、祖父と散歩に行った暑い日のあの光景を思い出す。そこで、ある一人の少年と毎回交わされる会話。祖父がいつも最初に声を掛ける。

「おかえり。」

「ただいま。」

「今、帰りなの。」

「はい。」

「気をつけて帰りなよ。」

少年は嬉しそうに、にっこり笑いうなずく。

僕は、祖父が日課にしていた夕方の散歩にいつも一緒に行っていた。そこで毎日会う、同じ時間に、施設のバスから降りて帰ってくる知的障害のある少年。祖父はいつも少年に優しく声を掛け、少年もはにかみながら応えていた。笑顔がとても素敵な少年だった。

祖父は、昔から優しくて人情が厚く、分け隔てなく誰とでも接し、人との付き合いを大切にすると人だった。特に僕には優しく、愛情をいっぱい受けて育った僕は、祖父が大好きであった。

「あの子と知り合いなの。」

ある日、祖父に尋ねた。

「いや、全然知らない子だよ。」

と祖父は涼しげな顔で言う。何気ない少年と祖父との会話なのだが、どうして知らない子に祖父はあんなに優しく声を掛けるのか不思議だった。というよりも本当は、少年に嫉妬していたといった方が正しいのかもしれない。

次の日もその次の日も、また少年に出会った。そして、祖父は今日もいつものように、優しく声を掛けた。

「どうして、知らない子なのにいつも話すの。」

僕は怒ったように強い口調で祖父に尋ねた。すると、祖父は少し間をおき、僕にゆっくり諭すように言った。

「毎日会うだろ。そしたら、挨拶みたいな感じで自然と話すようになったんだよ。気持ちが通じたのかな。それにあの子、いい顔しているだろ。今日も一日精一杯やりきったよって顔して。あの子を見ると応援したくなるし、こっちも頑張ろうという気持ちになる。それに何だか心が穏やかになって、優しくなれるんだよ。」

その当時は、祖父の言葉の意味がよく理解できなかつ

た。しかし、優しい眼差しで一生懸命に語りかけてくれた祖父の姿と、祖父の言葉は、静かだが僕の心に強く残った。そんな大好きな祖父が亡くなってからは、散歩に行かなくなり、それ以来、少年と会うことも無く、少年のことはすっかり頭から離れていった。

ある日の夕方、帰宅途中に久しぶりにあの少年と出会った。少年は、幼さが消え随分大人びていた。今日も施設の帰りなのだろう、あの時と同じ晴れやかで、充実感あふれた顔だった。擦れ違う時、何か行動を起こそうとも考えたが、とっさに動けない。声を掛ける勇気もない。その時、ふと祖父の言葉が頭をよぎった。僕は擦れ違ひざまに少し微笑み、軽く会釈をした。精一杯の行動だった。すると少年は微笑み返してくれた。心が通じたようで嬉しかった。彼から伝わってくる優しさとやわらかさ。何とも言えない、温かい気持ちと爽快感で胸がいっぱいになった。この時初めて、祖父の言葉の意味がやっとわかったような気がした。

今、僕は少年と祖父から大事なことに気付くことができた。人にはそれぞれ、その人の良さがあり味がある。心がある。障害があるとか、無いとかの区別なく、その人がかもしだす、人となりがある。笑顔であつたり、一生懸命な姿や優しさは人を引き付ける。この真の姿の良さに気付き、その人を認めるということが一番大切であるということ。人の外見だけにとらわれず、その人の魅力に気付き自分らしく生きている姿に寄り添い、その人の存在を認めること。少年から学んだように、人と違って、今、この時を精一杯頑張る姿、直向きな心は、人の心を引き付け、心まで豊かにしてくれる。認めるということは、尊重するということ。「障害者だから」「健常者だから」という垣根を無くそう。人には、一人一人生まれてくる大きな意味があり、役割は必ずある。僕は、こんな大事なこと気付こうとせず、偏見という重いふたをして、真の人の姿を見ようとしなかった狭い考えの自分を、心から恥ずかしいと思った。

今度、少年に出会ったなら、勇気を出して明るく挨拶してみよう。たとえ無視されても反応が鈍くても。いや、彼ならきっと素敵な笑顔で応えてくれるはず。

今日も青空が眩しかった。

「おじいさんが僕に伝えたかったことは、こういうことだったんだよね。」

あの日と同じように真夏の太陽が輝いている広い大空を見上げ、天を仰いだ。